

# 30<sup>th</sup> ANNIVERSARY

未来に広げるガラスびんの3R





## 発刊に際して

「ガラスびんリサイクル促進協議会」は、前身組織である「ガラスびんリサイクリング推進連合」の設立より数えて、本年で30周年を迎えることができました。これもひとえに、会員各社をはじめ関係各位のご支援ご厚情の賜物と深く感謝申し上げます。

時代の流れとともに我が国の環境行政も大きく変化して参りました。2000年代に入り、循環型社会形成推進基本法の施行とともに、資源有効利用促進法が改正され、循環型社会の形成を目指していくための3Rが総合的に推進されています。また容器包装リサイクル法が施行され、各主体(消費者・

ガラスびん3R促進協議会  
会長 石塚久継

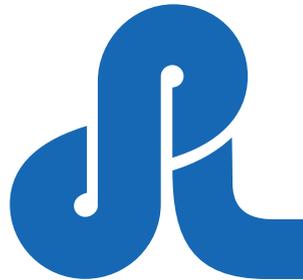


市町村・事業者)の役割分担を明確にし、資源の有効利用を図る取り組みが進んでいます。

当協議会としてもこうした動きと連動しながらガラスびんの3Rの普及・啓発に取り組んで参りました。ガラスびんは3Rをすべて備えた優れた容器です。この特徴を生かしながら持続的な循環型社会の実現に向けて今後とも貢献して参りたいと存じます。

なお、この30周年を機に組織名称を「ガラスびん3R促進協議会」に改め、さらに積極的にガラスびんの3Rに取り組んで参る所存です。今後とも倍旧のご支援ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

## 「ガラスびんリサイクリング推進連合」設立の経緯



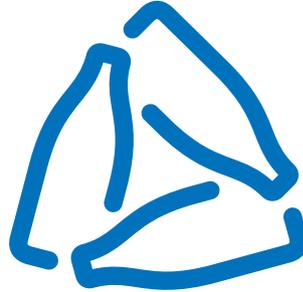
昭和57年(1982)に、通商産業省生活産業局長の諮問機関として、「ガラスびんリサイクリング推進会議」が設置されました。当時、ガラスびんは、その種類が多様化し、一般廃棄物として排出される量も増加傾向になり、リサイクリングに対する社会的要請が拡大してきました。

また、省資源・省エネルギー型の産業構造への転換が重要な課題となり、ガラスびんについても、省資源・省エネルギーにつながるリサイクリングの推進に対する国民の関心が高まってきたため、同会議ではガラスびんリサイクリングについて、その現状、意義および必要性について認識を深め、その推進のための問題点について意見交換を行い、推進方策を検討しました。

昭和58年(1983)には、5回にわたる同会議の報告書に基づき、ガラスびんリサイクルが推進されるための意見交換・普及啓発事業の実施、カレット回収活動の支援などの機能を有する組織の設立準備が開始されました。

昭和59年(1984)11月19日、ガラスびんリサイクルが推進されるための問題点を解決し、効率的な実施が図られるために必要な事業を行うことを目的として、「ガラスびんリサイクリング推進連合」が設立されました。設立には、ガラスびんメーカー、びん商・カレット商の他、ボトラー(ガラスびんのユーザー)、学識経験者、さらには地方公共団体、消費者団体など、幅広い分野の方々のご参加、ご協力をいただきました。

## 「ガラスびんリサイクル促進協議会」設立の経緯



平成7年(1995)6月16日に、容器包装リサイクル法(容器包装に係る分別収集および再商品化の促進などに関する法律)が公布されたことにより、ガラスびんのリサイクル推進事業は法律に基づく義務量の再商品化を行うなど、より一層実務的な業務内容へと転換が求められるようになりました。

また、その当時、ガラスびん関連業界では、将来的にガラスびんリサイクル全体が市場経済の中で採算の取れる事業となることを目指しており、指定法人以外にリサイクル推進の受け皿となり得る組織が必要となりました。

さらに、ガラスびん関連業界全体として、業界団体の機能の重複を避け、意志決定および業務遂行系統の一元化を図ることにより、経済的な運営を行うことが必要とされたことから、新しい組織へ改定が進められました。

平成8年(1996)11月19日、「ガラスびんリサイクリング推進連合」が従来行ってきた普及啓発、調査研究などの事業に加えて、ガラスびんのリサイクルを一層効率的に推進するために必要な事業を広範に行い、併せて容器包装リサイクル法に基づいて設立された「財団法人(現公益財団法人)日本容器包装リサイクル協会」を支援することにより、資源循環型社会の構築に寄与することを目的に、「ガラスびんリサイクル促進協議会」が設立されました。

本協議会では、市町村のカレットのみでなく、事業系およびボトラー系のカレットを含めたリサイクル全体の情報を一元化し、リサイクルがスムーズに行われるために必要な事業を展開しました。



# 魅力あふれる容器「ガラスびん」を 未来に向けて広げていくために…

ガラスびん以外に、スチール缶、アルミ缶、PETボトル、紙パック、プラスチック容器など、さまざまな容器が多様化するこの時代に、ガラスびんはどのような状況にあり、これから未来に向けて、どうなっていくことが望まれるのか…ガラスびん関連業界の若手世代に、今後の「ガラスびん3R促進協議会」の取り組みにつなげていくための率直な意見を語っていただきました。

- ボトラー …………… 株式会社 資生堂 白鶴酒造株式会社 株式会社 桃屋
- ガラスびんメーカー …… 石塚硝子株式会社 東洋ガラス株式会社 日本山村硝子株式会社
- ◆カレット商 …………… 有限会社 大原硝子店 硝和ガラス株式会社 株式会社 山一商会
- ▲びん商 …………… 株式会社 京福商店 株式会社 眞田

出席企業五十音順

本座談会では多くのご意見をいただきましたが、出席者の発言は会社名や個人名は掲載せず、業界ごとの記号で区分させていただきます。



## ガラスびんのデザイン性も機能性も、 未来に向けてどんどん進化させていきたい。

◆ まずは、お話しする機会が少ないボトラーの方々にお聞きしたいと思います。いろいろな容器がある中でガラスびんについて、どのような位置づけで考えておられますか？

● 弊社では、社長がびんにこだわっていることもあり、ほとんどの商品がびん入りです。中身が見えることや保存性に優れているところがびんの魅力ですね。安心安全が第一ということで、これからもびんを使っていくと思います。

● 消費者に受け入れられるのであれば、容器にはこだわりませんが、日本酒など光や外気に影響されやすい中身の品質を保持する容器としては、ガラスびんが優れていると認識しています。

● 化粧水や乳液などの容器は、もともとガラスびんが多かったのですが、今はほとんどPETボトルに変わってきています。成分の安定性や薬効感を考えると、びんがいいと思っているのですが、

「びんは重くて持ち運びが大変」というお客様の声が多くあります。びんを廃棄する際には、罪悪感もありますね。

■ 確かに他の容器に比べてびんは重いのですが、最近では、びん入りカクテルなどが、若者たちに人気があることも事実です。びんのかっこいいデザイン性が受け入れられているのだと思います。

◆ ガラスびんメーカーとして、今後売っていきたいのは、どんなびんですか？

■ こだわりのある中身については、デザインにこだわって、記憶に残るような形状のびんを提案したいですね。

■ 複雑な形状のびんを製造する際には、いろいろな制約があるのですが、技術革新を進めて、びんのデザイン性も機能性もどんどん進化させていきたいですね。

—— 未来に向かって、ガラスびんに期待すること、さらにどのようにガラスびんをアピールしていったらいいのか、ご意見をお聞かせください。

## PETボトルに比べてガラスびんは、 環境特性が消費者に届いていないように思う。

■ ガラスびんの原料は、けい砂、石灰石、ソーダ灰とびんを砕いたカレットで、日本にある資源を使えばびんを製造することができるわけです。このような環境特性は、びんをアピールする上で大きなポイントになると思います。

● PETボトルはしっかりリサイクルされ、軽量化も図り、資源を節約していることがアピールされていて、エコなイメージが伝わっていますが、ガラスびんについては環境特性が消費者に届いていないように思います。弊社では、ギフト商品に、重厚感のある深緑色のエコロジーボトルを使用しており、商品価値を高めていると思っています。ただし、エコロジーボトルがなぜエコなのか、消費者には伝わっていないようです。これが伝われば、もっと商品価値が高まると思うのですが。

■ なかなか現時点で環境にいいから購買につながるというのは難しいのではないのでしょうか。例えば、びんビールで乾杯するシーンをテレビドラマなどでアピールすることでも、購買意欲が高まるのではないかと、個人的には考えています。「びんビールで乾杯!」というようなキャンペーンを展開するのも、楽しいですね。

▲ 我々びん商もカレット商も、リユースもリサイクルもできてリデュースもやっているガラスびんが環境に優れていることは、当たり前だと思っていたのですが、実は消費者はそのことをわかっていなかったのです。私たちは謙虚に反省して、びんの環境特性をしっかりとアピールしていくことを、考えたほうがいいですね。子どもたちへ出前授業によるアプローチは、とても有効だと思いますね。

## びんがびんに生まれ変わることがわかれば、 捨てるという罪悪感はなくなる。

● 本当にそうだと思います。たぶん、お客様がコンビニでドリンクを買うときに何を基準で買うかという、環境にいいからではないと思います。ただ、飲み終わった容器を排出するときに、びんがびんに生まれ変わることがわかっているならば、捨てるという罪悪感はなくなるのではないのでしょうか？びんのほうがエコだということが伝わるのが大切ですね。



●ボトラー ■ガラスびんメーカー ◆カレット商 ▲びん商

■ ガラスびんに、捨てることの罪悪感があるとは、わかっていませんでした。

● 他の容器は排出の際にコンパクトになりますが、びんはそのままの大きさで重さを感じることで、罪悪感につながってしまいます。

● びんを排出することは、資源の再利用につながるエコなことだと、お客様が理解していただければ、ボトラーサイドもエコな容器を採用しているということで、企業イメージもよくなると思います。びんメーカーも好循環で回っていくと思います。ガラスびん業界は、びんがエコな容器であることをわかりやすく情報発信してほしいですね。

● びん商さんやカレット商さんが、ラベルを剥がしたり、洗浄したり努力していることを、環境に対する意識が高い女性やこれからの社会を担う子どもたちに、ぜひともPRしてほしいと思います。

■ 我々は業界をあげて、消費者に対してガラスびんの魅力や3Rについてきちんと説明する活動を増やしていかなければなりませんね。

● やはり、子どもたちがガラスびんにあまり触れていないという難しい状況がありますね。そこで、教育の場面で、びんがエコであることを理解してもらうことが重要だと思います。そういう場を増やさないといいけませんね。

■ 私たちが子どもの頃は、給食はびん入り牛乳でしたし、ラムネやジュースもびんに入っていて、リターナブルびんという言葉は知りませんでしたが、それらのびんが洗って繰り返し使われることは教えてもらっていました。今は、子どもたちに手にとってもらえるようなリターナブルびん入り飲料はあるのでしょうか？

—— 若い世代に向けて開発された新しいリターナブルびん「Rドロップス」には、お茶やサイダーなどが入れられています。規格統一のRマークびんですので、いろいろな地域で採用されていて、さらなる広がりが注目されています。





▲ 店頭に並んだリターナブルびん入り商品は、新しいびんに比べてさすが目立ってしまい、私たちびん商は、クレームに対応しているという状況が正直あります。そのきずは、繰り返し使っていることの証だということを、子どもたちには理解してほしいですね。

■ 何回使ってもきずが付かず、新びんを見分けがつかないびんがあればいいのかもしれませんが。ガラスびんメーカーの努力も必要だともいます。製造する側としては大変ですが、私としてはガラスびんの環境優位性をアピールする上で、リターナブルびんは重要だと思っています。

## 子どもたちがびんに触れることができる状況を、大人たちが作っていくことが必要。

▲ 私たちびん商は、世の中の容器は全て、リターナブルびんになればいいと考えているのですが、現状を考えると、なかなか難しいですね。時代は変化しているわけで、家庭の中にかにびんを入り込ませていくか、ということ工夫していかなければならないと思います。BBQやお花見などのアウトドアではびんはかさばる、冷蔵庫の中に一升びんを入れるのは難しい、という状況があることも事実です。それでも、未来に向けてびんの良さを伝えていくために子どもたちがびんに触れることができる状況を、大人たちが作っていくことが必要だと思います。

● ガラスびんには文化的な良さもあると思うのですが、それを伝えられるのは、本当にびんのある暮らしを経験してきたおじいさんやおばあさんかもしれません。その世代の方々に協力していただくのも大切ですね。

● ガラスびんも日本酒と同じで、消費者の嗜好が変わってしまったものを引き戻すことは難しいことですね。私たちは、日本酒を飲んだことがない若者に日本酒を手にとってもらうために、特別な日だけの日本酒ではなく、生活に密着したところでイベントやキャンペーンなどを仕掛けて、日本酒をもぐりこませるような演出を考えたりしています。ガラスびんも、まずは手にとってもらうところからスタートすることが大切ですね。そのためにも、若者がガラスびんで飲むと楽しくなるような場を提供することも必要ではないでしょうか。



◆ びん入り商品を広げていくためには、流通への働きかけも必要ではないでしょうか。みんなで力を合わせてびんの良さをわかってもらうことも必要ですね。本当に安くて軽いだけでいいのかと思ってしまうのですが…。

■ コンビニに対応したびん入りのプレミアムビールも登場していますね。

◆ コンビニもですが、消費者にとって、自動販売機を利用することが増えているように思います。自動販売機に対応したびんを増やすことは考えられるのでしょうか？

■ びんを重くして強度を増すことにより自動販売機への対応は可能なのですが、メーカーの割れに対する不安から難しい状況にありますね。

◆ 景気が回復して、消費者が高級志向になっていくと、ガラスびんにとってもプラスの要素につながると思いますが、消費者がびんは環境に良いと認識した場合には、ボトラーにとってびんは使いやすくなるのでしょうか？

● 環境に良いというコンセプトの商品をお選びいただく消費者がいるわけですから、そこをアピールした商品を出すことは考えられます。

◆ 消費者の環境に対する意識が高まっている今、びんが環境に良いことをきちんとしっかりアピールすれば、今までびん入り商品を買わなかった人が、目を向けてくれるチャンスが生まれるわけですね。さらに、冷蔵庫にびん入り商品が増えれば、子どもたちがびんに触れる機会が増えることにつながりますね。



## びんの環境特性やびんの良さを伝えれば、 よりびんが使いやすくなる。

● ボトラーとしては、ガラスびんが優れた容器であることは重々承知しているのですが、お客様に伝わっていないのが問題ですね。そこをお客様に理解いただけたら、我々も大手を振ってびんを使うことができると思います。びんの環境特性がしっかり伝わってくると、うれしいですね。

——3Rに対応しているガラスびんの環境特性をアピールできれば、ボトラーにとっても販売促進につながると思います。環境に良いと言っても、いろいろありますが、何を伝えるかを明確にすることが必要ですね。

■ 「びん toびん」ということだけでも、すごくインパクトがあると思うのですが、いかがでしょうか？

● 「びん toびん」もそうですが、何百年も前のびんが新しいびんの原料として使われていることは、非常にインパクトがあることだと思います。びんはいつまでも繰り返し資源として使われていくことが伝われば、きっと消費者は目からうろこでしょうね。

■ ガラスびんメーカーは100年以上前からカレットを使っているわけですから、今のびんに昔のびんが利用されているというのは非常に夢のあることです。ぜひアピールしたいことですね。

◆ やはり、びんのリサイクル特性やリユース特性をアピールすることは

●ボトラー ■ガラスびんメーカー ◆カレット商 ▲びん商

大切ですね。それにより、ガラスびんメーカーはびんを製造しやすくなり、ボトラーはびんを使いやすくなり、カレット商はリサイクルしやすくなり、びん商はリユースしやすくなるというのが理想だと思います。

■ 「びん toびん」がわかることもいいと思いますが、カレット使用率をアピールしたらいかがでしょうか？数字を出すことにより、びんが環境に良いことを、明確にアピールできると思います。

● アピールするだけでは、消費者は何も動かないと思います。それによって、自分の生活がラクになるとか、心が満たされるとかいった仕掛けが必要ですね。環境にどれだけいいのかをきちんと示してあげると、購買意欲は高まると思います。

▲ 洗って繰り返し使えるのは、他素材容器にはなくリターナブルびんだけではないでしょうか。ガラスびん全体の復権をめざすのであれば、リターナブルびんをもっとアピールしてもいいと思います。それにより、ガラスびん全体が盛り上がると思います。

▲ ちょっと矛盾する考え方かもしれませんが、環境面でガラスびんを訴求する方向とは別に、無条件に楽しいびんがあってもいいのではないのでしょうか。消費者が「なんだ!これ!」と思わず手にとってしまうようなものがあってもいいですね。

—— たくさんの有意義なご意見、ありがとうございました。この座談会で強く感じましたのは、ガラスびんの環境特性やガラスびんの良さが、消費者に伝わりきれていないということでした。今後は、「ガラスびん3R促進協議会」として、何をどのように伝えていくのかを、きちんと整理して、会員の皆様のご協力をいただきながら、次につなげていこうと考えております。何卒よろしく願いいたします。



## 「ガラスびんリサイクリング」から「ガラスびん3R」へ

# 30年の歩み

昭和59年度(1984)～平成26年度(2014)



▲推進連合のマーク



▲あきびんポスト



▲絵本「うまれかわった りさ」



▲ガラスびんリサイクリングのキャラクター

### 昭和 59 年度 (1984)

- 「ガラスびんリサイクリング推進連合」発足
- 推進連合発足前より実施してきた「あきびんポストによる回収実験」を継続
- 事務局を日本製塩協会内から西新橋の新橋田中ビルに移転
- 「ニュースリサイクリング(びんの3R通信の前身)を週1回作成し、会員、地方自治体、関連団体、報道機関などへ配布

### 昭和 60 年度 (1985)

- 幼稚園、小学校低学年向けのガラスびんリサイクリングに関する副読本として、絵本「うまれかわった りさ」を制作、配布
- ガラスびんリサイクリングのシンボルマークやキャラクターを定め、これらを用いてPR資料を作成

### 昭和 61 年度 (1986)

- アルミ箔ラベル混入による製品化への影響の研究を実施
- 込みカレットを使用した場合の色調範

囲の研究を実施

- 日本ガラスびん協会と共同で標準型リターナブルびんを開発

### 昭和 62 年度 (1987)

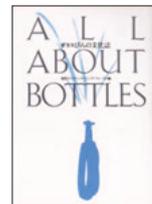
- リサイクリングしやすい印刷技術が求められ、ACL(着色)技術の研究に着手
- 東京都内の集合住宅地を対象にした「あきびんポストによる回収実験」を終了、本格実施に移行

### 昭和 63 年度 (1988)

- カレットの品質向上と合理化を図り、カレット処理設備に関する開発研究を実施
- 日本リサイクル運動市民の会主催のガレージセールとタイアップして、「ガラスびんリサイクリングキャンペーン」を実施
- 「ガラスびんの文化誌」を発刊(現代ガラスパッケージング・フォーラム編)

### 平成元年度 (1989)

- 地方自治体における分別収集を促進す



▲ガラスびんの文化誌



※写真は平成2年当時

元ガラスびんリサイクリング推進連合会長  
東京大学名誉教授  
林周二氏

ガラスびんは文化とつながっている容器です。  
ぜひともガラスの文化について関心を持っていただくことを望みます。



▲「うまれかわった りさ」の豆本

私は昭和40年頃から流通に関する研究をやっており、「流通革命」という本を出したりもしました。流通には必ず物流を伴い、その延長として廃棄物が出てきますが、それをリサイクルすることで、資源の節約や世の中をきれいにするにつながります。物流の一環としてリサイクルがあり、その循環にふさわしい容器として存在するのがガラスびんです。

「ガラスびんリサイクリング推進連合」では、各業界の方々のご協力とご理解により、緊張のなかにも大変楽しい日々を過ごさせていただきました。さまざまな出会いの中で一番記憶に残っている方が、リサイクルの重要性を熱心に語っておられた山村徳太郎さん(当時山村硝子株式会社顧問)です。また、アイデアマンだった佐伯邦男さん(当時東洋ガラス株式会社代表取締役社長)もよく覚えています。

推進連合の発足当時は、山村さんや佐伯さんを含め各業界の方々がアイデアを出し合って、シンボルマークや広報ツールを作っていたように思います。幼稚園、小学校低学年向けの絵本「うまれかわった りさ」の企画では、大きなサイズとともに豆本も作ることを、私は強く主張しました。小さくして、たくさん作って、より多くの子どもたちに配って、ガラスびんリサイクルのことを知ってもらいたいと考えました。

現在は30年前に比べて他素材容器の数も増えて、ガラスびんを取り巻く状況も変化してきましたが、ガラスという素材が人間の文化の中でどのような意味を持っているのか、今の促進協議会の方々に振り返っていただきたいですね。ガラスびんは文化とつながっている容器です。ぜひともガラスの文化について関心を持っていただくことを望みます。



▲リサイクリングブック

るため、資源化実施状況について調査

- 「21世紀のベストパッケージ・リターナブルびんを考える」というシンポジウムを開催
- カルチャーイベント「おもしろガラスびんびん WORLD」を開催
- 「リサイクリングブッカー地球と私たちを元気にする本」を制作、配布

### 平成2年度(1990)

- あきびんの分別収集モデル事業開始 P箱を無償提供
- 国際ガラスびんシンポジウムを開催
- パンフレット「人と地球によく似合う。ガラスびんのリサイクリング。」を制作、全国の公共図書館へ配布

### 平成3年度(1991)

- 福島県で再資源化モデル事業(通商産業省委託事業)実施
- 日本ガラスびん協会と共同で統一規格びんマークデザインを制作
- 地方自治体などに向け「ガラスびんリサイクリングマニュアル」を作成
- ガラスびんリサイクリング関係業界連絡会議を設置

### 平成4年度(1992)

- 奈良市で再資源化モデル事業(通商産業



▲パンフレット(本編)

省委託事業)を実施

- PRビデオ「びんランドのきかんしゃ」を制作して、各種イベントに利用
- 陶磁器類選別機を開発

### 平成5年度(1993)

- 全国びん商連合会と共同によるリターナブルびんのパンフレットを制作、配布
- 生活クラブ生活協同組合「グリーンシステム」への支援活動を実施
- パンフレット「ガラスびんリサイクリング」本編と要約版を制作、配布
- TAMAらいふ協会主催「VOICE93 多摩21 暮らしの祭典」に出展

### 平成6年度(1994)

- 「ガラスびん推進プロジェクト」(略称RAM プロジェクト) 発足
- リターナブルびん回収モデル事業(通産省委託事業)を実施
- PRビデオ「甦るガラスびん」を制作
- 事務局を新橋田中ビルより日本ガラス工業センター(新橋)2階に移転

### 平成7年度(1995)

- ガラスびんの流通総量とリターナブルびんの使用量およびP函の流通量調査を実施
- 全国の市町村におけるガラスびん資源回収実態調査を実施



▲パンフレット



▲規格統一びんのRマーク



▲ガラスびんリサイクルマニュアル



▲ビデオに使用したびんランド



▲RAMプロジェクトのキャラクター



▲ビデオ「甦るガラスびん」



元ガラスびんリサイクリング推進連合副会長  
元東洋ガラス株式会社代表取締役社長  
佐伯 邦男 氏

ガラスびんメーカー、ボトラー、カレット商、びん商が、  
業界の垣根を越えて取り組んだことに大きな意義がありました。



▲週1回発行された「ニュースリサイクリング」

ガラスびんリサイクリング推進連合の設立に当たり、通商産業省(経済産業省の前身)生活産業局に在籍していた森雅博さんを事務局長に抜擢しようと、山村硝子株式会社(日本山村硝子株式会社の前身)の社長だった山村徳太郎氏と一緒に、幾度となく通商産業省にお願いしに行った記憶があります。粘り強くお願いした結果、何とか承諾していただきました。ガラスびんリサイクルを推進する団体の柱として、森さんが大きな力を発揮していただいたことに感謝しております。

推進連合を立ち上げてからは、カレット回収システムの研究からガラスびんリサイクルの普及啓発まで、やることは沢山ありましたが、ガラスびんメーカー、ボトラー、カレット商、びん商が、業界の垣根を越えて一丸となって取り組んでいったことに大きな意義があったように思います。

そんな体制において、推進連合の発足当初から、広報紙ニュースリサイクリング小委員会を中心に「ニュースリサイクリング」を週1回作成し、会員、地方自治体、関連団体、報道機関などへ配布しました。これにより、ガラスびんリサイクルの最新情報を、関連業界全体で共有化でき、それぞれの取り組みに反映できたと思っています。

ガラスびん業界の今後については、他素材容器との競争に勝ち抜いていくために、新しい技術を取り入れていくことが重要です。とくに軽量化のため製造技術の精度を上げること、さらにリサイクルにおける分別収集や処理技術の精度を上げていくことが求められると思います。ガラスびん3R促進協議会としてやることは山ほどあると思います。これからの業界の垣根を越えた協力・推進体制に期待します。



▲促進協議会のマーク

## 平成 8 年度 (1996)

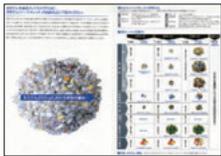
- 「ガラスびんリサイクル促進協議会」設立
- ガラスびんのリサイクル・リユース情報を一元化するために、トータルフローシステムを導入
- 「1.8L 壺再利用事業者協議会」設立
- 「移動式カレット粒状化設備に関する研究開発・実証試験」について(株)トヨ・システムプラントと共同調査研究を開始
- パンフレット「ガラスびんリサイクル」の本編とダイジェスト版ならびに「容器包装リサイクル法とガラスびんの再商品化」を制作、配布



▲ガラスびんリサイクルと容器包装

## 平成 9 年度 (1997)

- カレット品質向上のパンフレットを制作、配布
- 輸入びん実態調査を実施
- 移動式カレット粒状化設備を研究開発



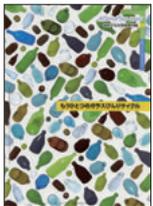
▲カレット品質向上のパンフレット



▲移動式カレット粒状化設備

## 平成 10 年度 (1998)

- カレット多用途セミナー開催
- エコロジーボトルについてエコマーク製品の認定を申請
- 各種イベントでガラスびんリサイクルの展示に利用できるサンプルボックスを制作



▲多用途利用パンフレット

## 平成 11 年度 (1999)

- 11月11日、設立15周年記念講演会・懇親会を開催

- 「容器包装リサイクル法」に基づき、平成12年度から平成16年度までの5ヶ年の再商品化計画量を制定
- 「循環型社会形成推進基本法」により、リターナブルびん(リユース)に関する促進協としての取り組みを模索

## 平成 12 年度 (2000)

- ガラス入りアスファルト舗装の再生合材による試験舗装を実施
- 促進協議会のウェブサイト開設



▲ウェブサイト開設DM

## 平成 13 年度 (2001)

- 遠隔地対策プロジェクト、リサイクル率定義検討プロジェクト、再商品化費用検討プロジェクト、トータルフローIT導入プロジェクト、他用途ネットワークIT導入プロジェクト、法律問題検討プロジェクト、広報委員会を設置
- EPR(拡大生産者責任)についての研究事業を実施



▲他用途利用支援ITパンフレット

## 平成 14 年度 (2002)

- 他用途利用の情報、カレットの供給状況をインターネットにより提供できるシステムが完成
- ボトラー検討委員会を中心にデポジットシステムについての研究事業を実施
- 環境省「容器包装LCAに係る調査・検



※写真は平成5年当時

日本びんカレットリサイクル協会顧問  
三栄ガラス株式会社代表取締役会長  
杉山 嘉一 氏

### 推進連合時代に、自治体や消費者団体に対して

ガラスびんリサイクルの重要性や仕組みを積極的に啓発しました。



▲日本製壺協会  
リサイクリング委員会の  
シンボルマーク

昭和49年(1974)頃の第一次石油ショックにより、ガラスびん製造時の溶融燃料を削減することになり、それまで副原料として使っていたカレットの利用率が28%から45%に増大しました。カレット利用率を10%増やすことでエネルギーを2.5%削減できるということで、省エネ対策と生産コストの節約にカレットが利用されるようになっていきました。

当時、ガラスびんリサイクリング推進連合が発足する前に、日本製壺協会(日本ガラスびん協会の前身)の中に設置されたリサイクリング委員会には、カレット業界からも多くのメンバーが参加しました。そこでは、カレットの回収ルート拡大、受け入れ基準の作成、カレット処理設備の標準化などについて、意見交換をして、ガラスびんリサイクルの推進活動に積極的に協力しました。

推進連合時代に思い出に残っていることは、ガラスびんリサイクルをPRするビデオの作成に協力したことです。家庭の中でどのようにガラスびんが使われているのかを描写するシーンで、モデルの家族で、食卓を囲む姿を撮影しました。またパンフレットや広告を作る際にも、カレット商としてのメッセージを発信させていただきました。

推進連合の立ち上げ当初は、まだまだガラスびんリサイクルが浸透していない時代でした。自治体に対して分別収集の実施を啓発したり、各地の「ごみを考える会」や生協団体などに対しては、出前授業のようなやり方で、リサイクルの重要性や仕組みについて積極的に啓発しました。それが、現在の質の高いガラスびんリサイクルの基盤になっていると思っています。

討事業」へ参画

●事務局を新橋の日本ガラス工業センターより、田中田村町ビル8階に移転

### 平成 15 年度 (2003)

- 小学生向けのパンフレット「ミルちゃんとまなぶくんの学習ノート」とビデオ「くるくるくるくるガラスびんリサイクル」を制作、配布
- 南九州地域における900ml茶びんの統一リユースモデル事業（環境省循環型社会形成実証事業）へ参画



▲小学生向けパンフレット

### 平成 16 年度 (2004)

- 平成17年度の容器包装リサイクル法の見直しに向けて、「容リ法検討プロジェクト」を設けて対応を検討
- 当協議会の事業内用・事業規模について検討するための「中長期課題検討プロジェクト」を設けて、検討を実施
- 専門業界紙22社、記者24名を招き、懇談会を初めて実施



▲カレット工場見学



▲3R推進団体連絡会の結成

### 平成 17 年度 (2005)

- 3Rの推進に即した規約に改正し、3R推進部会を設置
- カレット処理工場・製びん工場で記者の研修会を実施
- 容器包装リサイクル8団体共同で、「3R推進のための自主行動計画の策定」

と「3R推進団体連絡会の結成」を発表

### 平成 18 年度 (2006)

- ボトラー団体などに対して、びんの3R推進自主行動計画に関する説明会を実施
- 「容器包装リサイクルフォーラム in 横浜」「容器包装3R推進セミナー」「第1回3R活動推進フォーラム全国大会」に参画
- 環境省と経済産業省の委託を受け、リターナブルびんの普及・回収促進のためのモデル事業を実施

### 平成 19 年度 (2007)

- 自治体に向けて、化粧品びんリサイクルの啓発活動を開始
- 「3Rのためのガラス容器自主設計ガイドライン」を作成し、ボトラー団体説明会を実施
- 「第2回容器包装3R推進フォーラム in 神戸」「エコテクノ2007 3R&GPN 推進フェア (北九州)」に、3R推進団体連絡会で参画
- 経済産業省委託「地域省エネ型リユース促進事業—リユース実証事業」を受託
- 3R推進団体連絡会(8団体)で、「容器包装の3R推進のための自主行動計画・2007年フォローアップ報告会」を経団連会館で開催、以降毎年フォローアップ報告会を開催



▲化粧品びんリサイクル啓発チラシ



▲焼酎のRマークびん(900ml)



株式会社トベ商事 代表取締役社長

戸部 昇 氏

促進協議会でいろんな方々と交流したことで、  
ガラスびんには3Rという矢があることがわかりました。

明治26年(1894)創業のトベ商事は、ガラスびんに価値を見出して、120年以上にわたり、びんの商売を続けてきました。自動製びん機によるオートメーション化の時代には自動洗びん機を導入し、びんが多様化した時代には35種類のびんに対応する洗びん機を開発し、さらに平成に入り容器が多様化すると、総合リサイクルビジネスを展開し、それぞれの時代の流れに対応してきました。

リターナブルびんの普及に関しては、さまざまな事業に積極的に協力しています。平成5年(1993)にスタートした生活クラブ生活協同組合連合会の「グリーンシステム」を支援し、16品目のびん容器を4種類のRマークびんに規格統一してリユースしていくことに取り組みました。

また平成15年度(2003)・16年度(2004)に実施された環境省の「南九

州における900ml茶びんの統一リユースシステムモデル事業」にも協力しました。最近では、学校給食にびん牛乳を導入しようという取り組みにも協力していますが、何回も使用できるリターナブルびんが活躍できるように実際に広げていかなければなりません。諦めてはだめですね。

そんな中で、促進協議会の集まりにおいては、ガラスびんメーカーや中身メーカーで環境に携わっている方々から、貴重な情報をいただきました。異業種との交流により、環境に対するさまざまな考え方に触れたことは、非常にプラスになりました。交流の場で多くの話を聞いたことでガラスびんは、リターナブルびんを筆頭に他素材容器に勝る3Rという矢があることを認識するとともに、びんの特性を改めて自負するしだいです。それは大きなメリットであると考えています。



▲DVD「ガラスびん3R作戦」



▲パンフレット「ガラスびん3R作戦」



▲びんの3R推進ポスター



▲現事務局



▲ガラスびんの流れポスター

●小学生向けのDVD「ガラスびん3R作戦 ペンギン南極へ帰る」を制作し、ウェブサイトでも公開

### 平成20年度(2008)

- ボトラー団体を対象に、「ガラスびん3R自主行動計画(平成19年度活動)報告会」を開催
- 「第3回容器包装3R推進フォーラム(2008東京)」「第3回3R推進全国大会(山形)」に、3R推進団体連絡会で参画
- 小学生向けのパンフレット「ガラスびん3R作戦」を制作、配布
- ガラスびんの3Rを推進するポスター「地球によく効く「3R」のびん詰」を制作、配布

### 平成21年度(2009)

- リターナブルびんポータルサイト「リターナブルびんナビ」を開設
- ボトラー正会員各社を対象に、ガラスびんの3Rに関するアンケートを実施
- ボトラーとびんメーカーを中心に、ガラスびんの3Rに関する座談会を実施
- 事務局を田中田村町ビルより、新宿区百人町の日本ガラス工業センタービル1階に移転(2月15日)
- ガラスびんのリユースとリサイクルの流れがわかるポスター「くるくるくるくるガラスびん」を制作



▲ガラスびんBOOK



▲ボトラーの座談会



▲ボトラーの工場見学会



▲びんで育てるカイワレ大根



▲「びん to びん」ポスター

### 平成22年度(2010)

- ボトラー正会員を対象に、ガラスびん工場とカレット工場の見学会を関西地区と関東地区で実施
- 小学生・中学生を対象に、「ガラスびんリサイクル・ポスターコンクール」を初めて開催
- あきびん排出時のルールと混ぜてはいけないものを啓発するチラシ制作、配布
- 3Rのキャラクターであるペンギンを使ったシールを制作しイベントなどで配布
- 3R推進団体連絡会(8団体)で、2015年度を目標年次とした「第二次自主行動計画」を中央環境審議会で発表

### 平成23年度(2011)

- 小学生・中学生を対象に、「エコな容器・ガラスびんポスターコンクール」を開催
- 「びんリユース推進全国協議会」の設立に参加、同協議会の活動状況を「リターナブルナビ」の中で紹介
- 広口ガラスびんで育てるかいわれ大根のセットを制作、イベントなどで配布
- 「びん to びん」のリサイクルをアピールするポスターを制作、配布

### 平成24年度(2012)

- 小学生・中学生を対象に、「ガラスびん絵画・ポスターコンクール」を開催

## カレット回収システムの研究事業 あきびんポストによる回収実験

東京都に始まり全国主要都市の自治体で、あきびんポストにより分別収集の基礎づくりを展開しました。



▲あきびんポスト

この回収実験は、日本製壺協会(日本ガラスびん協会の前身)リサイクル委員会と東京都清掃局が中心となり、昭和58年(1983)10月に東京都江東区の集合住宅地を対象に、常設型のあきびんポスト(回収容器)を設置したことから始まりました。

あきびんポストによる回収実験の目的は、集合住宅地から直接ガラスびんを回収するシステムの実現可能性を検討することで、このシステムが住民にどのように受け入れられ、びんの色分けや異物の混入防止にどの程度の協力が得られるのか、またどの程度びんが回収されるのかなどを調査することから始まりました。さらに回収量や品質などの要因による回収コストや処理コストを調査し、トータルコストを削減するために、ポストの改良や回収車両の改良を実施しました。

昭和62年(1987)には、東京都内における回収実験を終了し、本格実施へ移行。京都市、川崎市、横浜市など、全国の主要都市へと拡大。自治体と推進連合との共同実験のほか、自治体がポスト費用を負担して回収する事例も増加していきました。その後、さまざまな地域で、あきびんポストが導入され、平成8年(1996)3月末の時点で、全国2055箇所を設置。分別収集の基礎づくりが展開されました。

■東京都におけるあきびんポストによる回収実験の実績(昭和62年1月~12月)

設置数	338
世帯数	84,551
回収量(t/年)	1,256
1箇所の回収量(kg/月)	314
1世帯の回収量(kg/月)	1.26





▲びんリサイクルムービー

●ガラスびんリサイクルのムービー「びん to びんで行こう」を制作し、ウェブサイトと You Tube で公開

●リターナブルびん入り大和茶「と、わ (To WA)」の「容器グラフィックデザインコンペティション&展覧会」に協賛

●「全国自治体のガラスびん資源化収集の現況と事例研究報告書」発表と環境省容器包装リサイクル法他の各ブロック別説明会で説明



▲「と、わ」デザインコンペ表彰式

### 平成 25 年度 (2013)

●小学生・中学生を対象に、「ガラスびん絵画・ポスターコンクール」を開催

●ガラスびんリユースのムービー「また会おうよ！リターナブルびん」を制作し、ウェブサイトと You Tube で公開

●環境省のリサイクル推進室の関係者に向けて、カレット工場とガラスびん工場の見学会を開催

●ガラスびんに関する環境教育について、小中学校の先生方と座談会を開催

●「全国自治体のガラスびん資源化収集の現況と事例研究報告書」をウェブサイトに掲載

●びんの資源化量拡大に向けて、環境省のデータに基づいた市町村別のガラスびん再商品化量実績データのウェブサイトでの掲示を開始



▲びんリユースムービー



▲小学生の工場見学会



▲先生方の工場見学会



▲びんリデュースムービー

### 平成 26 年度 (2014)

●小学校 4 年生の児童を対象に、ガラスびん工場の見学会を開催

●東京都小中学校環境教育研究会の主催で、小中学校の先生方を対象にガラスびん 3R 見学会と題し、カレット工場とガラスびん工場の見学会を実施

●小学生向けに、ガラスびんについて授業で学べる教材を制作

●ガラスびんリデュースのムービー「びんもすっきりダイエット」を制作し、ウェブサイトと You Tube で公開

●創立 30 周年記念祝賀会開催(11月19日)



●創立 30 周年を機に、組織名称を「ガラスびん 3R 促進協議会」に改定



## ペンギンキャラクターの広報展開

地球温暖化防止の象徴である

ペンギンをキャラクターにして、

ガラスびんの 3R に関する広報活動に幅広く展開しています。

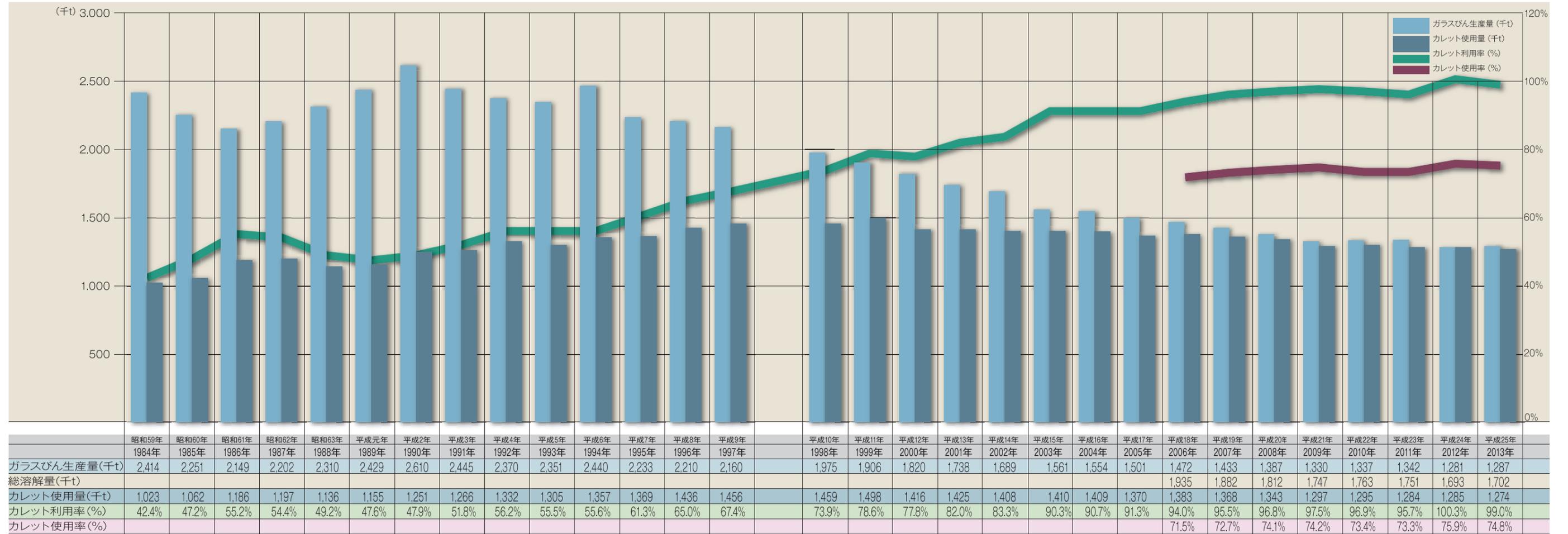
平成 19 年(2007)に、ガラスびんの 3R について小学生にわかりやすく紹介するための DVD を制作しました。南極を追われたペンギンがガラスびんの街「ボトルフォレスト」でラムネびんと出会い、ガラスびん 3R について教えてもらうというストーリーです。このムービーに登場している青色のペンギンは、その後、エコプロダクツ展やポスターコンクール、ウェブサイトのキッズサイト、リーフレット、ノベルティなどに展開して、オリジナル広報キャラクターとして大活躍しています。

地球温暖化防止の象徴として広くメディアに取り上げられているペンギンを題材にしたキャラクターは、まさにガラスびんの環境優位性をイメージ付けるのにふさわしく、子どもから大人まで、たくさんの人に可愛がられています。



平成 25 年(2013)には、びんリサイクルのムービーで緑色のペンギンが、びんリユースのムービーでオレンジ色のペンギンが、さらに平成 26 年(2014)には、びんリデュースムービーでピンク色のペンギンが、新たに登場しました。今後、このペンギンたちをガラスびん 3R 促進協議会の広報キャラクターとして、有効に展開させていきたいと考えています。

# ガラスびん生産量・カレット使用量・カレット利用率・カレット使用率の推移



資料:「ガラスびん生産量」…昭和59年より通商産業省・経済産業省「雑貨統計」、平成14年より「窯業・建材統計」 「カレット利用率」……「カレット使用量」÷「ガラスびん生産量」  
 「総溶解量」………窯業・建材統計のデータを日本ガラスびん協会の資料を基に拡大推計 「カレット使用率」……「カレット使用量」÷「総溶解量」  
 「カレット使用量」………日本製瓶協会の資料およびガラスびんフォーラム資料

## ガラスびん絵画・ポスターコンクール

小・中学生を対象に、よりガラスびんの知識を深めてもらうために、4年にわたり「ガラスびん絵画・ポスターコンクール」を開催しました。



▲平成23年(2011)の審査会

平成22年(2010)に、びんのリサイクル通信(びんの3R通信の前身)の創刊20号を記念して、「ガラスびんリサイクル・ポスターコンクール」を開催しました。目的は小・中学生に対して、よりガラスびんに興味をもってもらう、ガラスびんの3R(リデュース・リユース・リサイクル)について知識を深めてもらうことで、「エコな容器ガラスびんポスターコンクール」、「ガラスびん絵画・ポスターコンクール」と名称を変えながら、平成25年(2013)まで4年にわたり実施しました。

第1回の応募は145件、第2回が337件、第3回が443件、第4回が553件と、着実にその数を増やしていき、さらに作品のレベルも年々向上していきました。平成24年(2012)のコンクールでは、前年に起きた東日本大震災で被災し、南相馬市の小学校の仮設校舎で授業をされていた中学生からもたくさんの作品を送っていただきました。

このコンクールを実施するに当たり、全国造形教育連盟の先生方にご協力いただき、厳正に入賞者の審査をしていただきました。毎回最優秀賞(第1回は促進協議会 会長賞)については、直接学校に伺い表彰式を実施。入賞作品については、ウェブサイトで発表するとともに、年末に開催されるエコプロダクツ展の当協議会ブースでも掲示して、多くの来場者に見ていただきました。



▲ペンギンキャラクターの賞状

## 容器包装リサイクル法への対応

公益財団法人日本容器包装リサイクル協会と3R推進団体連絡会と連携して、容器包装リサイクル法に適切に対応した事業を展開しています。

平成9年(1997)に、ごみの減量化と資源の有効利用を目的に、容器包装リサイクル法が施行され、消費者・市町村・事業者の役割が定められました。ガラスびんにおいては、消費者は排出ルールを守ること、市町村は分別収集する際に「無色・茶色・その他の色」の3色に区分すること、事業者(びんの製造事業者や中身の販売事業者)は、自らまたは公益財団法人日本容器包装リサイクル協会に委託してリサイクルすることが義務づけられています。

平成16年(2004)からは、産業構造審議会および中央環境審議会において見直し議論が始まり、平成18年(2006)6月に改正容器包装リサイクル法が成立・公布され、平成18年(2006)から平成20年(2008)にかけて施行されました。

平成17年(2005)には、容器包装に係るリサイクル8団体が「容器包装リサイクル法の目的達成への提言」と題した提言を公表。8団体に

よる3R推進団体連絡会が結成され、平成16年度(2004)実績を基に平成22年度(2010)を目標年次とした「事業者による3R推進に向けた自主行動計画」、さらに平成27年度(2015)を目標年次とした「容器包装3Rのための第二次自主行動計画」を公表し、着実な実行により成果を上げ、環境負荷・社会コストの低減に寄与しています。

平成25年(2013)から、再び見直しに向けて産業構造審議会・中央環境審議会(合同会合)が開始となり、当協議会の会長も委員として出席して議論に参加しています。



# ガラスびん3R促進協議会 会員

## 正会員

### 【ガラスびんメーカー】

石塚硝子株式会社  
第一硝子株式会社  
東洋ガラス株式会社  
日本耐酸壘工業株式会社  
日本山村硝子株式会社  
磯矢硝子工業株式会社  
株式会社 大久保製壘所  
日本精工硝子株式会社  
興亜硝子株式会社  
大商硝子株式会社  
株式会社 野崎硝子製作所  
柏洋硝子株式会社  
株式会社 山村製壘所

### 【ガラスびんのユーザー(ボトラー)】

アサヒビール株式会社  
味の素株式会社  
味の素ゼネラルフーズ株式会社  
アヲハタ株式会社  
雲海酒造株式会社  
エバラ食品工業株式会社  
株式会社 えひめ飲料  
大関株式会社  
大塚食品株式会社  
大塚製菓株式会社  
カゴメ株式会社  
カルピス株式会社  
菊正宗酒造株式会社  
キッコーマン株式会社  
キューピー株式会社  
キリン株式会社  
月桂冠株式会社  
合同酒精株式会社  
コカ・コーラ協会  
小西酒造株式会社  
サッポロビール株式会社  
サントリービール株式会社  
三和酒類株式会社  
株式会社 スドージャム  
大正製菓株式会社  
大鵬薬品工業株式会社  
ダイドードリンコ株式会社

宝酒造株式会社  
辰馬本家酒造株式会社  
ニッカウキスキー株式会社  
日本化粧品工業連合会  
日本盛株式会社  
日本洋酒酒造組合  
ネスレ日本株式会社  
ハウスウェルネスフーズ株式会社  
ハウス食品グループ本社株式会社  
白鶴酒造株式会社  
ヒガシマル醤油株式会社  
ヒゲタ醤油株式会社  
株式会社 Mizkan Partners  
メルシャン株式会社  
株式会社 桃屋  
ヤマキ株式会社

### 【びん商・カレット商、その他】

株式会社 ウイズウェイストジャパン  
エビスガラス株式会社  
大阪容器株式会社  
有限会社 大原硝子店  
有限会社 勝山商店  
株式会社 京福商店  
協和硝子株式会社  
株式会社 光陽  
三栄ガラス株式会社  
JW ガラスリサイクル株式会社  
昌平株式会社  
硝和ガラス株式会社  
新日本流通株式会社  
全国びん商連合会  
株式会社 タカハシ  
東洋カレット株式会社  
株式会社 トベ商事  
豊島硝子株式会社  
中村ガラス株式会社  
有限会社 南久  
日進興業株式会社  
北海道リサイクリング有限会社  
丸硝株式会社  
株式会社 山一商会  
ヤマトマテリアル株式会社  
株式会社 六甲

## 賛助会員

井原築炉工業株式会社  
株式会社 衛藤  
エムハート・グラス・ジャパン株式会社  
大阪硝子株式会社  
株式会社 カンヨー  
京都硝子壘問屋協同組合  
協同硝子株式会社  
協和硝子株式会社  
株式会社 研硝社  
広栄株式会社  
小林硝子株式会社  
小林容器株式会社  
サンゴバン・ティーエム株式会社  
株式会社 三裕  
清水工業株式会社  
星硝株式会社  
セントラル硝子株式会社  
ソーダアッシュジャパン株式会社  
中央硝子株式会社  
中央商工株式会社  
中央炉材鋳業株式会社  
千代田硝子株式会社  
東京硝子株式会社  
株式会社 トウチュウ  
東邦商事株式会社  
東北硅砂株式会社  
株式会社 トーモク  
東洋ガラス機械株式会社  
日硝実業株式会社  
日本機械金型株式会社  
日本びんカレットリサイクル協会  
株式会社 ノリタケ TCF  
藤井鋳業株式会社  
不二鋳材株式会社  
扶桑精工株式会社  
株式会社 フーズコンテナー

# 会長・副会長の変遷

	会長	副会長				
ガラスびんリサイクルリング推進連合	昭和59年度(1984)	山村 徳太郎 山村硝子株式会社顧問	長谷川 一郎 キリンビール株式会社広報部長	原 淳男 サントリー株式会社消費者室長		
	昭和60年度(1985)	林 周二 東京大学名誉教授	佐伯 邦男 東洋ガラス株式会社代表取締役社長	内田 昭彦 キリンビール株式会社広報部長		
	昭和61年度(1986)			寺崎 篤 キリンビール株式会社消費者室長	永田 久則 サントリー株式会社お客様相談部長	
	昭和62年度(1987)				尾茂 勝俊 キリンビール株式会社社会環境部 部長代理	原 淳男 サントリー株式会社お客様相談部長
	昭和63年度(1988)			駒谷 進 キリンビール株式会社社会環境部お客様相談室長		土居 敬和 サントリー株式会社生活環境室課長
	平成 元年度(1989)					吉川 東 東洋ガラス株式会社代表取締役社長
	平成 2年度(1990)					
	平成 3年度(1991)					
	平成 4年度(1992)					
	平成 5年度(1993)					
平成 6年度(1994)						
平成 7年度(1995)						
ガラスびんリサイクル促進協議会	平成 8年度(1996)	黒田 治 山村硝子株式会社代表取締役社長	大槻 一雄 第一硝子株式会社代表取締役社長			
	平成 9年度(1997)					
	平成 10年度(1998)					
	平成 11年度(1999)	山縣 勁吉 東洋ガラス株式会社代表取締役社長	堤 俊彦 日本耐酸壇工業株式会社代表取締役社長			
	平成 12年度(2000)	石塚 芳三 石塚硝子株式会社代表取締役社長	吉中 淳 株式会社 アサヒビール/パックス代表取締役社長			
	平成 13年度(2001)					
	平成 14年度(2002)	小川 昇 日本山村硝子株式会社代表取締役会長	岩本重己 第一硝子株式会社代表取締役社長			
	平成 15年度(2003)					
	平成 16年度(2004)	小山 達治 東洋ガラス株式会社代表取締役社長	堤 俊彦 日本耐酸壇工業株式会社代表取締役社長			
	平成 17年度(2005)					
	平成 18年度(2006)	山中 昭廣 石塚硝子株式会社代表取締役社長	岩本重己 第一硝子株式会社代表取締役社長			
	平成 19年度(2007)					
	平成 20年度(2008)	山村 幸治 日本山村硝子株式会社代表取締役社長	堤 俊彦 日本耐酸壇工業株式会社代表取締役社長			
	平成 21年度(2009)					
	平成 22年度(2010)	丸橋 吉次 東洋ガラス株式会社代表取締役社長	大西 貞明 磯矢硝子工業株式会社取締役副社長			
	平成 23年度(2011)					
平成 24年度(2012)	清水 泰行 東洋ガラス株式会社代表取締役社長					
平成 25年度(2013)	石塚 久継 石塚硝子株式会社代表取締役社長	神崎 恵 第一硝子株式会社代表取締役社長				
平成 26年度(2014)						

※社名・肩書は就任当時

## 30周年企画検討プロジェクト(敬称略、50音順)

石崎 喜也 アサヒビール株式会社  
 鵜澤 大典 石塚硝子株式会社  
 大原 寛司 有限会社 大原硝子店  
 笠井 聡志 株式会社 京福商店  
 金子 竜也 硝和ガラス株式会社  
 櫻田 健太 株式会社 山一商会  
 鈴木 良明 東洋ガラス株式会社  
 鳥居 豊彦 日本山村硝子株式会社  
 本多 永幸 コカ・コーライストジャパン 株式会社  
 幸 智道 ガラスびん3R促進協議会 事務局長  
 嶺重 謙 ガラスびん3R促進協議会 事務局

## 編集後記

ガラスびん3R促進協議会  
事務局長 幸 智道



<http://www.glass-3r.jp>

当協議会の設立の経緯ならびに30年の歩みを中心に「創立30周年記念誌」を制作することができました。制作にご協力いただきました諸先輩ならびに関係者の皆様に深く感謝いたします。

編集に先立ち30周年企画検討プロジェクトでは、会員の皆様に当協議会の取り組みをしっかりとご理解いただくための内容にすべきという方針を決定し、制作にあたりました。同時に再編集をおこなった新「ガラスびんBOOK」と合わせてご利用いただければ幸いです。

今後は、新たな次の30年に向けて、さらに積極的にガラスびんの3Rに取り組んで参る所存でございます。倍旧のご支援ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

また、当協議会のウェブサイトでは、ガラスびん3Rに関する有益な情報をタイムリーに掲載しておりますので、お気軽にアクセスをいただきますようお願い申し上げます。

